

弥生社会における環濠集落の成立と展開

藤原 哲

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

1980年代までの研究において、環濠集落は弥生時代の代表的な集落であり、かつ防御的な機能を有しているという認識が強かった。近年では環濠集落像の見直しが進み、防御説に立脚しない論旨を展開する研究者も多く、集落ではない環濠の存在も指摘されるなど、新たな環濠像が数多く提示されるようになってきている。

従来のように「環濠集落＝標準的な弥生集落」という見方は正しいのであろうか、小論では日本列島や弥生集落全体の中で、環濠集落がどのように位置づけられるのかの検討を試みた。

研究方法としては、近年、数多く調査されるようになった環濠集落のうち、ある程度構造が明らかな約300遺跡を集成し、時系列と分布とを中心として再整理する。また、集落規模や立地条件をもとに環濠集落の分類を行った。

上記の分析を通じて、環濠集落は源流となる韓国においても、日本列島での弥生時代を通じてみても、標準的な集落ではなく、むしろ極めて希少な集落形態であることを明らかにした。また、集落ではない環濠遺跡が多数あることも改めて認めることができた。

環濠集落の分類結果では、農耕文化が本格的に定着した時期に成立するような中・小規模の農耕集落が大多数であった。しかし、農耕文化成立期の全ての弥生集落に環濠が巡っていたわけではないため、環濠集落とはある特定の農耕集団の所産によるものと推察した。大規模な環濠集落や高地性の環濠集落などについては、更に数が少ない特殊な集落であることを指摘した。

これらの分析から、これまで標準的な弥生集落と思われがちな環濠集落が極めて希少な例であり、日本列島の弥生社会では農耕文化そのものを受け入れない地域、農耕文化と環濠集落の両方を受け入れる地域、農耕文化は受け入れても環濠集落を受け入れない地域など、様々な地域差が想定できた。

キーワード：環濠集落、環濠遺跡、農耕文化、農耕集団、希少性

- | | |
|-----------------|------------------|
| 1. はじめに | 3.3 弥生時代前期後半 |
| 2. 研究史 | 4. 環濠集落の展開 |
| 3. 環濠集落の成立 | 5. 環濠遺跡の分類 |
| 3.1 環濠集落の源流 | 6. 代表的な環濠遺跡の集落形態 |
| 3.2 弥生時代早期～前期前半 | 7. おわりに |

1. はじめに

弥生時代の集落形態としては「環濠集落」がよく知られている。環濠集落とは何か？ 元来、それは地理学上の概念であり、“堀や溝で囲まれた集落”のことを指している。

地理学において環濠集落は城下町や寺内町といった様々な集落形態のうちの一類型、どちらかといえば希少な集落景観である。日本史を振り返ると、主に弥生時代、10～11世紀の東北地方（青森県高屋敷館遺跡）、室町～戦国期の近畿地方（大阪府堺環濠都市、奈良県稗田環濠集落）などで環濠集落が営まれてきた。このうち、中世より続く稗田、平野などの環濠集落は現在でも存在しており、落ち着いた歴史的景観を今に伝えている。

考古学では主として弥生時代の環濠集落に注目が集まり、囲郭集落、環溝集落などとも称されてきた。そして環濠集落は弥生時代の代表的集落類型、否、弥生集落そのもののイメージで捉えられてきた。例えば1986年に出版された『弥生文化の研究 第7巻 弥生集落』において金関恕は次のように述べている〔金関1986〕。

「（弥生時代の）標識的な集落といえば、平野を見下ろすごく低い台地上に建てられた10数棟の家屋よりなり、その周囲に幅広い環濠をめぐらしたものであろう」。

一般的な概説書や教科書などで登場する「弥

生のムラ」も数棟の竪穴住居や掘立柱建物に囲まれて円形の濠や壕が巡っている、といった復元がほとんどである。そのような「標識的な弥生集落＝環濠集落」という見方は本当に正しいのであろうか？ 小論では弥生時代の環濠集落の成立と展開を概観し、この問題を考えていきたい。

2. 研究史

弥生時代の環濠集落をはじめて考古学的に検討したのは鏡山猛である。鏡山はその遺構を「環溝住居趾」と称し「幾つかの家戸を構成要素とする住居集団の一地劃」として集落論の中で環濠を解釈した〔鏡山1956a・1956b・1958・1960〕。しかし同時期に小野忠熙によって注目された高地性集落の研究を通じて環濠の機能論（環濠機能＝防御用）に注目が集中されるようになる〔小野1951・1959〕。

そして1970年代～80年代を通じては環濠の機能的側面（環濠の防御論）から弥生社会の戦乱的な政治的・社会的構造を解明しようとする研究が相次いで行われた。石野博信は低地の環濠の防御性についてはじめて言及し〔石野1973〕、佐原真は環濠集落を「濠や土塁をめぐらす防御的なムラ」〔佐原1979〕として説明した〔佐原1979〕。環濠集落を総括的に取り上げた都出比呂志も環濠の機能的側面に注目しており〔都出

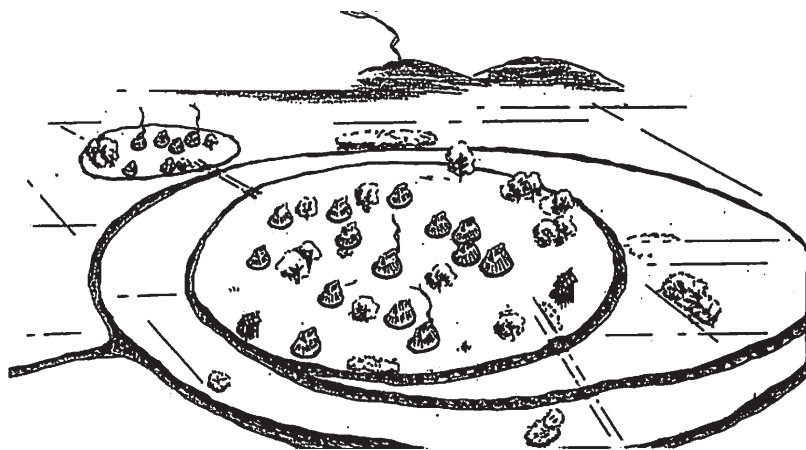


図1 弥生集落のイメージ（埋蔵文化財研究会 2006 より）

1983]、佐原はそれらの研究を基にして弥生社会の戦争論を発展させ、都出も大規模な環濠集落に「城塞集落」という用語を用いるなど、環濠集落の防御性を更に明確にしている〔都出1997〕。何れも環濠の機能的な側面から集落の防御性を重視した研究であったといえるであろう。森岡秀人や松木武彦などの研究〔森岡1996、松木1995〕においても環濠集落や高地性集落はその機能性（防御集落）が重視され、弥生時代の戦乱的な様相の解明を目指したものであった。

これらの研究の進捗と同時に、1980年代には大阪府池上・曾根遺跡や佐賀県吉野ヶ里遺跡の調査などで大々的な報道が繰り返され、環濠集落は国民的な注目も浴び、「弥生時代の集落＝環濠集落＝防御集落」という認識が一般化するようになっていた。

1990年以降にいたると、環濠の機能を防御用以外に求める研究も多くなる。環濠の機能については象徴的な面を求めるもの〔武末1990、吉留1994〕、用・排水的機能を重視するもの〔前田1996〕、集落や集団を維持するための機能的装置として環濠を評価するもの〔菅1999、豆谷2003、岡本2004、小出2006〕など多様な見解が示された。しかしどのような見解が論じられようとも環濠の機能的側面を重視した研究方向には変わらない。

一方、弥生時代の集落研究そのものとしては単位集団論や弥生都市論〔乾1996、広瀬1998〕、基礎集団論〔若林2001〕などが代表的な研究として知られる。それらは個々の地域や集落を詳細に分析するものが中心であり、弥生集落全体の中で環濠集落を位置付けるような研究は比較的にみることができない。関東地域において安藤広道が集落群の中での環濠集落を検討しているがこれも関東地方の、鶴見川流域などかなり個別の地域に限定されている〔安藤2003〕。

個々の遺跡や地域の研究は重要であるが、近年では環濠集落の集成〔埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会1988、大阪府立弥生文化博

物館2001〕や韓国や中国など東アジアでの成果も広く知られるようになった〔九州考古学ほか1998、朱2002、Nikitinほか2002、国立歴史民俗博物館2009、韓日集落研究会2009〕。また各地域の事例研究では環濠の様々な特色も指摘されるようになるなど〔小郡市教育委員会2003、山崎ほか2005、鳥取県教育委員会監修2005〕、全国的・東アジア的な環濠集落の基礎的な資料蓄積は非常に進んでおり、環濠集落の全体像を検討することも可能になってきている。

そこで小論では、環濠集落をやや鳥瞰的に概観し、従来研究が集中した環濠の機能的側面よりも、弥生集落全体の中で環濠集落が占める位置について検討してみたい。そのために列島各地において環濠集落の成立と廃絶がどのように行われたのかを追いながら、時期的・地域的な特色を抽出する作業を試みる。

3. 環濠集落の成立

3.1 環濠集落の源流

弥生時代における環濠集落の出現の背景には朝鮮半島南部からの一列だけのものではなく、より古い縄文時代以来の北方ルートと長江流域との関係が存在した公算が強い、という見解もあるが〔寺沢1999〕、石器や土器など総合的な文化的所産から考えて、直接的な祖形としては韓国南部地域を源流とするのが妥当であろう。

原三国時代の環濠も含めると韓国では20～30遺跡の環濠集落が検出されている。そのうち、集落構造の把握が可能な無紋土器時代の環濠集落は芳基里遺跡、八達洞遺跡、南山遺跡などが挙げられよう。

日本列島の最も古い板付遺跡の環濠と比較してみると、韓国では大栗里遺跡のように比較的古い環濠集落が清原で見つかつているが、環濠集落の大部分は蔚山（芳基里、検丹里）、大邱（八達洞）、昌原（南山）、晋州（大坪里玉房）などの嶺南地方、かつて慶尚道と呼ばれていた半島南東部に集中している。立地条件も丘陵上に立



図2 韓国の環濠集落と日本の早期～前期（前半）の環濠が指摘される遺跡（番号は表3と対応）

地するものが多く、南山遺跡のように比高90mにも達する高地性の集落も含まれている。このような占地は低台地（11m）に立地する板付遺跡と比べると一つの相違点である。

環濠集落の平面形態としては検丹里遺跡が119×70mの卵型の楕円形で最も典型的な環濠である。芳基里の環濠は140×90m規模のいびつな長楕円、八達洞の環濠は集落を一周せず環濠の進行方向の等高線に沿って住居群を一行に配置している。南山遺跡の環濠規模は（100m）×44mの隅丸方形を呈している、というように環濠は楕円形を基礎として若干のバリエーションが存在する。板付をはじめとする日本列島の初期環濠も径100m内外の卵型が多く、概ね韓国のもので類似しているであろう。環濠の断面については、V字溝が主体である点は日韓の環濠に共通している。また、韓国の環濠集落では環濠外で検出される住居も多く、蓮岩洞遺跡のように儀礼場所の指摘がされている遺跡も存在するが、多数の環濠内からは住居群が検出されており、基本的には集落の一部である事例が多いと考えられる。

このように日韓の環濠集落には相違点も認められるものの、共通する要素が多く、環濠の源流を韓国のものに求めてよいであろう¹⁾。こういった韓国の環濠集落は嶺南地方を中心に分布する比較的局地的な集落類型、特殊な集落類型であることは日本列島の環濠集落を考えるにあたって非常に重要である。

3.2 弥生時代早期～前期前半

日本列島において弥生時代早期（夜臼）～前期前半（板付Ⅰ）で環濠と考えられる遺構が検出されたものは福岡県江辻遺跡、那珂遺跡群、有田遺跡群、板付遺跡、上岩田遺跡、東郷登り田遺跡、今川遺跡、佐賀県小楠遺跡などである。

しかし江辻遺跡の溝は非常に小規模で集落の周りを全周しないことも明らかになっており、環濠集落でない可能性が高い。その他の遺跡で集落構造の明確なものはほとんど存在せず、現在の発掘成果では弥生時代早期～前期初頭の環濠集落はほぼ皆無であるか、非常に少数であったと評価することができるだろう。万人が納得



図3 前期（後半）環濠の地域性（番号は表3と対応）

しうる最古の環濠遺構を検出した板付遺跡においても肝心の住居群が環濠内から検出されておらず、住居群については「削平」されたとする立場〔山崎1990〕と住居が当初より存在したことに疑問を持つ立場〔片岡2003〕があるなど集落構造としては不明瞭な点が多い。

弥生時代早期～前期の暦年代については、近年いくつかの見解が並存しているが、最も長期間に及ぶC¹⁴年代を採用すると〔藤尾2003、2005、2009〕弥生時代の開始（早期）はBC965～780年前後、前期（I期初頭）がBC700～650年前後が想定でき、弥生時代早期～前期の年代が約300年にも及んでいる。この300年間に北部九州で環濠集落の可能性が指摘されているのは数例、多くても10数例に過ぎないのである。菜畑遺跡や曲り田遺跡などのように初期水田を伴う遺跡では環濠が認められないので、弥生文化が開始さ

れた段階について環濠を巡らす集団と巡らさない集団とが併存していたとしても、環濠集落そのものは少数派の特殊な集落形態であったと評価することができるであろう。

3.3 弥生時代前期後半

弥生時代前期後半～中期初頭（板付Ⅱ～城ノ越）、いわゆる環濠集落は爆発的に増加するとされ、その分布も九州から中国、四国、近畿、東海まで拡大するとされてきた。

しかし北部九州の福岡県葛川遺跡、大井三倉遺跡、光岡長尾遺跡、横隈北田遺跡、横隈山遺跡、彼坪遺跡、神手遺跡、大碓遺跡、佐賀県八ツ並金丸遺跡、山口県綾羅木郷遺跡、吉永遺跡、下東遺跡、広島県大宮遺跡、愛媛県岩崎遺跡などの環濠内部での発掘成果からすれば、環濠内に同時期の住居が見られる例、すなわち溝が集落

をめぐるという環濠集落の景観を復元できる事例はほとんどない。環濠内には住居がみられず、貯蔵穴群のみが検出される事例が圧倒的に多いのである。

貯蔵穴専用環濠の存在は早くより指摘されていたが、前期後半の北部九州～瀬戸内東部地域においては貯蔵穴専用環濠こそが、むしろ一般的な環濠のあり方である²⁾。佐賀県吉野ヶ里遺跡など環濠集落の存在も確実ではあろうが、当該地域の弥生集落全体からみれば、環濠を有する遺跡そのものが部分的である上、さらに住居群を伴うもの（環濠集落）となると、その存在は極めて特殊な事例といえるだろう。

弥生時代前期後半～中期初頭の山陰地域の環濠においても積極的に集落とされるものはほぼ皆無である。島根県田和山遺跡、鳥取県清水谷遺跡、天王原遺跡などの調査成果では環濠内部には貯蔵穴さえもなく、極端に言えば何もない空白地を環濠で囲っているものが目立つ。日本海側の兵庫県東家の上遺跡、京都府扇谷遺跡、途中ヶ丘遺跡でも環濠と考えられる大溝が検出されているが、トレンチ調査が主で環濠内部の住居群の様子はよくわかっていない。

確実な環濠集落、集落域を溝が巡っていると考えられる遺跡をまとめて認めることができるのは瀬戸内東部～近畿地方にかけてである。当該地の環濠集落は立地も低地で溝の断面形態はU字溝、多条溝を指向するなど、台地に占地しV字溝を巡らす北部九州や山陰の環濠とは全く異なった様相を示す。

瀬戸内東部の最も古い（Ⅰ様式古～中）環濠集落の一つとしては兵庫県大開遺跡が挙げられ岡山県百間川遺跡、清水谷遺跡、香川県龍川五条遺跡、中の池遺跡、鴨部・川田遺跡、鬼無藤井遺跡などで住居群を伴う環濠が報告されている。これより東の近畿地方では大阪府田井中遺跡、池上曾根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、和歌山県堅田遺跡、京都府雲宮遺跡、三重県大谷遺跡、永井遺跡などの環濠内には住居群やピット群が

検出されている。三重県筋違遺跡、愛知県山中遺跡、松河戸遺跡などでも前期の環濠が見つまっているが住居群の構造が良くわからず、環濠集落になるか否かは今後の調査が必要であろう。

4. 環濠集落の展開

環濠集落が日本列島に成立する早期～前期の過程を概観した。先述したように弥生時代の時間幅や非集落の環濠遺跡の存在などを考慮すると、一時期における同時代の遺跡や集落全体からすれば環濠集落の数は決して多くはなく、分布も偏在的で、やや特殊な集落形態であったことが理解できる。そのような特殊な集落形態である環濠集落はその後、どのような展開をしたのであろうか、各地域における環濠集落の消長をみてみたい。

九州地域

北部九州では前期末に多数見られた貯蔵穴専用の環濠は中期初頭までにほぼ廃絶し、中期を通じては佐賀県吉野ヶ里遺跡や原の辻遺跡などの若干例を除けば環濠集落は発達しない。この地域において環濠集落が顕著になるのは後期以降である。

九州における後期の環濠は実に多様で、非常に小さい円形の環濠（佐賀県原古賀三本谷遺跡）、小さい方形の環濠（福岡県野方中原遺跡、比恵遺跡、穴江塚田遺跡）、大型の方形環濠（佐賀県千塔山遺跡）、平地の大型円形環濠（福岡県今宿五郎江、平塚川添遺跡、雀居遺跡）、高地性の小さな環濠（福岡県西ノ迫遺跡）、台地上の大型環濠（熊本県蒲生上原遺跡）丘陵上の大型環濠（熊本県西弥護免遺跡）など実に様々である。また佐賀県吉野ヶ里遺跡や長崎県原の辻遺跡など前期から営まれている環濠集落は弥生時代後期に最も大規模化する。

中国・山陰地域

中国・山陰地域でも貯蔵穴専用環濠や空白地

を囲っていたような環濠は中期初頭までにほぼ廃絶する。山口県下では突抜遺跡、宮ヶ久保遺跡、朝田墳墓群、岡山遺跡など中期の環濠集落や高地性集落がやや集中的に見られるが、特に大規模なものや安定的に長期にわたる集落は存在しない。

弥生集落全体に占める環濠集落の数も少なく、広島県助平2号遺跡や鳥取県妻木晩田遺跡、兵庫県大盛山遺跡など前期末にみられたような空地を囲む環濠遺跡が中～後期を通じて散発的に現われる他は環濠集落をあまり見るできない。

島根県では古志本郷遺跡などで後期の環濠集落の指摘がある。しかしそれらの遺跡では大溝が確認されるものの、乱流的な溝や自然流路の自然堤防上に集落が占地している状況であって、確実に集落をめぐっているのかは検討を要する。

近畿地域

瀬戸内東部～近畿地方にかけては前期末の環濠集落が一定数認められたが、瀬戸内東部では中期初頭までに環濠のほとんどは廃絶する。一方、近畿地方においては大阪府池上曾根遺跡、和歌山県太田黒田遺跡、奈良県唐古鍵遺跡、多遺跡、平等坊岩室遺跡、坪井大福遺跡など、主に前期から環濠集落として継続する遺跡で円弧を描くような大溝が検出されている。それらの環濠集落は平面規模が300～500m以上の極めて大規模な集落であるのが特徴で、沖積低地に営まれ、多条環濠の例が多いという特色を示す。近畿南部の集落は中期末に最盛期を迎えるが、滋賀県下之郷遺跡、服部遺跡、下鉤遺跡など近畿北部ではややテンポが遅れて中期末～後期に大規模化している。

関東・中部地域

東日本での弥生中期中頃以前に遡る環濠の検出例は少なく、静岡県西通北遺跡、神奈川県中里遺跡、埼玉県池上遺跡などで検出された溝において環濠の指摘もなされている。しかし内部



図4 大崎台遺跡

構造が不明であったり環濠とするのに否定的な見解もあるなど明確な環濠集落はほぼ皆無といっていよい。

弥生中期末の段階では、西日本では相対的に確実な環濠集落は少ないが、これに反して関東地方では環濠集落が爆発的に増大する。神奈川県朝光寺原遺跡、大塚遺跡、権田原遺跡、砂田台遺跡、東京都飛鳥山遺跡、千葉県国府台遺跡、大崎台遺跡、道庭遺跡など、関東地方の環濠集落は概ね等質的で径100m～200m前後の集落規模、台地上にV字溝を掘削し、環濠内には数十棟の竪穴住居が見られ、環濠外に方形周溝墓群の墓域が存在する、というスタイルではほぼ共通する。

東海・中部地方では愛知県朝日遺跡など大規模なものも見られるが、それは例外的な存在で、その他では梅坪遺跡、見晴台遺跡、三王山遺跡、猫島遺跡、伝法寺野田遺跡など径100～150mほどの中・小型の環濠集落が多く、近年の調査では三重県堀町遺跡、天王遺跡、愛知県赤日子遺跡など後期の環濠が数多く報告されている。また北陸地方では後期を中心に石川県杉谷チャノバタケ遺跡、新潟県裏山遺跡など高地性の環濠集落が目立っている。

表1 環濠遺跡・環濠集落の分類一覧表

I-a1 (小型低地集落) 33 (17%)	I-c1 (大型低地集落) 13 (7%)	II-b1 (中型低地非集落) 0
I-a2 (小型台地集落) 42 (21%)	I-c2 (大型台地集落) 4 (2%)	II-b2 (中型台地非集落) 1 (1%)
I-a3 (小型高地集落) 16 (8%)	I-c3 (大型高地集落) 5 (3%)	II-b3 (中型高地非集落) 3 (2%)
I-b1 (中型低地集落) 11 (6%)	II-a1 (小型低地非集落) 9 (5%)	II-c1 (大型低地非集落) 0
I-b2 (中型台地集落) 25 (13%)	II-a2 (小型台地非集落) 21 (11%)	II-c2 (大型台地非集落) 1 (1%)
I-b3 (中型高地集落) 3 (2%)	II-a3 (小型高地非集落) 9 (5%)	II-c3 (大型高地非集落) 0

表2 環濠遺跡・環濠集落の地域的変遷

	前期前半	前期後半	中期	後期
九州	I-a2, II-a2 ?	II-a2		方形環濠ほか
中国		II-a3 (山陰)、 I-a1 (瀬戸内)	I-a2 II-a3	I-a3 II-a3
近畿		I-a1	I-c1	I-c1 (滋賀)
中部		I-a1	I-b2	I-a3 (北陸)
関東			I-b2	I-b2

5. 環濠遺跡の分類

以上、駆け足で各地域での環濠遺跡・環濠集落の実例をみてきた。ここでは以下の視点から環濠集落の大まかな分類を行ってみよう。

まず、遺跡の構造上を集落 (I) と非集落 (II) とに大別した上で³⁾、集落の規模を小型 (a)、中型 (b)、大型 (c) とわけ、また農耕を行う上で重要な立地条件から低地 (1)、台地 (2)、高地 (3) とで分類する⁴⁾。これらの組み合わせによって、環濠遺跡は理念的には I-a1 型から II-c3 型まで 18 類型にわけることができる。

環濠内から住居などが認められず、貯蔵穴や土坑、空白地のみであるものは非集落の環濠遺跡 (II 型) として大別しておいたが、貯蔵穴専用環濠などの性格としては除湿・対獣対策などの環濠を、何もない空白地を環濠で囲っているものなどについては聖域を聖別するような象徴的機能を考え、本論のテーマとなる「環濠集落」とは全く異なる特殊な遺構の性格が想定される。

付表でまとめておいたように、環濠を伴う遺跡の可能性が高いもので管見に触れたものは約

300、分類できた列島内の遺跡数は196遺跡であるが、非環濠集落 (II 型) は44遺跡にも及び、明確な環濠遺跡全体数 (196) の22%も占めている。従来、環濠集落として一括して考えられた遺跡においても非集落の環濠遺跡が多いのであり、このことは「環濠集落=防御集落」というような説明の多かった環濠の機能を考える上でも重要である。

環濠集落 (I 型) の中で最も多いものは42遺跡 (21%) の I-a2 型 (小型台地の集落) で、次いで33遺跡 (17%) の I-a1 型 (小型低地集落)、25遺跡 (13%) の I-b2 型 (中型台地の集落) の順となる。

このうち、小型低地の環濠集落は前期後半の西日本に多く環濠の断面がU字型を呈し、中型台地の環濠集落は中期末～後期の関東に多くV字溝となるなどの差異はあるものの、農耕文化が開始された弥生時代という歴史性から考えると、東西それぞれの地域において本格的に農耕文化が定着した段階に現われている中・小規模の農耕集落という共通項を有している。環濠集落の種類のうちで最も多いのはこのような特性

を有する中小の農耕集落であり、環濠遺跡全体の半数（56%）を占めている。

それに対し、I-a3型（小型高地性集落）、I-b3型（中型高地性集落）、I-c3型（大型高地性集落）などの高地性集落は環濠集落数全体の中でも数が少なく、水稻農耕に不適な位置に立地し、農耕文化が成熟してきた後期の西日本～北陸にかけて数多く分布しているので通常の集落とは性格が大きく異なっている。また、平面形が300mを超える大型集落（I-c1, c2型）も環濠集落全体からみてやや注意を引く数（22遺跡9%）である。

以上の分類一覧と各時期での代表的な環濠遺跡を表1、2でまとめておいた。小論ではこれらの細かな分類を詳細する余地はないので、①I-a1型、やI-b2型などの農耕文化定着期に出現する環濠集落、②極めて大規模で特殊な環濠集落（I-c1, c2型）、③高地性集落に伴う環濠集落（I-a3型、I-c3型）など代表的な性格の環濠集落を中心として次章で検討していきたい。

6. 代表的な環濠遺跡の集落形態

①西日本における農耕文化定着期（前期後半）の環濠集落は概ね小規模で土器型式が1型式程度の短期間のものが多い。例えば兵庫県大塚遺跡（I-a1型）の環濠集落は畿内第I様式古段階から中段階、集落規模も最大で長辺70m、環濠内の主要遺構は竪穴住居4棟、貯蔵穴11基で集落人口も30～40人規模を超えることはないであろう。西日本における弥生時代初頭の非常に小さな農耕集団の営んだ集落類型の一つといえる。

一方、関東地方で農耕文化が本格的に定着する中期末～後期に出現する環濠集落はやや規模が大きい。著名な神奈川県大塚遺跡（I-b2型）の規模は200×130m程度で、竪穴住居85棟、掘立柱建物10棟、土坑7基などが検出されている。竪穴住居の6割に重複関係があるため1時期には概ね150人程度の人口が想定されている。大塚遺跡を“小さな農村”とするならば大塚遺跡は“大きな農村”程度の規模であるといえるだろう。

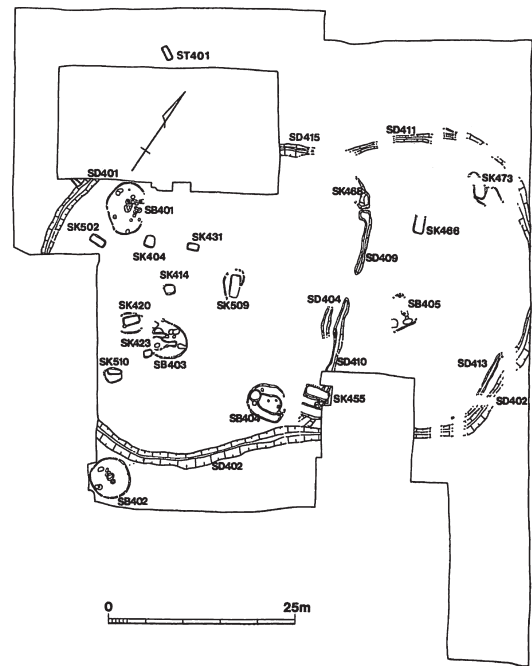


図5 大塚遺跡

また、関東の環濠集落についても短期間のものが多く大塚遺跡は中期後半（宮ノ台期）の期間内に成立・展開・終焉を迎え、断面V字状の環濠も早くより機能を停止している。

このように、西日本においても、東日本においても農耕文化が本格的に定着する時期には中小の農耕集落と思われる環濠集落が各地域で出現するという事例が多い。しかし同時期の集落の全てが環濠を巡らせていたわけではない。これまで見たように環濠集落は源流となる韓国地域においても局所的な集落であり、その後の列島内における展開においても常に希少な集落であった。

例えば2006年の『弥生集落の成立と展開』の中では西日本で住居が認められる遺跡（＝集落）として755遺跡が集成されているが、このうち環濠集落や環濠遺跡の可能性の高いものとしては約70余例、集落総数の10分の1にも満たないのである。

すなわち、弥生時代の諸集団の中には環濠集落を軸として成立する集団と、環濠を営まない集団とが並存していたものの、環濠集落を営ん

だ集団はむしろ少数派を占めるものであったと評価することができる。農耕文化が定着する過程では各地へ各小集団が拡散や移動を行ったと考えられるが、それぞれの集団には様々な系統や文化的背景が存在しており、それらの一部の特定の農耕集団たちが自らのアイデンティティを守るためや、何らかの防御意識から、居住域と他とを区別・区画するために環濠を掘削したと考えられるのである。

特に関東地方の環濠集落は方形周溝墓とセットで台地上に築かれ、規模や構造も均一性の強いものが多いが（I-a2やI-b2型）、それら環濠集落が最も多く分布する関東南部においても環濠集落は決して均等には分布せず、中期後半では神奈川県横浜市域、千葉県市原市域などの一帯に集中的に分布しており、神奈川、千葉などは中期末に、東京、埼玉などは後期に多いという風に環濠集落の存在にも時間的な差異が認められる。それらの事実からしても、環濠集落とは、様々な小集団の中でも特定の農耕集団たちによって営まれた可能性が高いといえるであろう。

②中期～後期の近畿地方や後期の九州地域に

においては前期にまで遡ることのできる極めて大規模な環濠集落が形成されている。大規模環濠集落の性格については、例えば平面形が400～500m以上にも及ぶ大阪府池上曾根遺跡（I-c1型）の人口を推計したところ、1000人規模の人口で、周辺地域の農耕経済力では人口が維持できず、大小の農村レベルとは異なって都市的な機能を有していた特殊な遺跡であったと評価することができた〔藤原2002〕。

弥生時代中期の西日本においては福岡県下稗田遺跡、愛媛県文京遺跡など環濠を巡らさない大集落もあり、むしろ近畿地方を除いて環濠集落は発達しない。その近畿地方においても大阪府山之内遺跡、亀井遺跡など環濠を巡らさない大集落が存在しているが、拠点的な大集落における環濠の有無にはどのような差異が考えられるであろうか。

大阪府池上曾根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡（I-c1型）、佐賀県吉野ヶ里遺跡（I-c2型）などの大規模な環濠集落は集落成立の早い段階（弥生前期）から大溝を有している。

農耕文化成立時の環濠集落については、特定の農耕集団によって営まれた可能性を示唆したが、それら環濠集落の多くは短期間のもので、在地の文化と融合する中で失われていく。香川県下でみれば前期には中の池遺跡、五条龍川遺跡、鬼無藤井遺跡、鴨部・川田遺跡など集中的にI-a1型の環濠集落が築かれるが、そのほとんどは前期末に廃絶し、以降は環濠が築かれることはない。

農耕文化定着期の環濠は短期間で忘れ去られることの多い遺構だといえるのであるが、しかし近畿地方に成立した一部の環濠集落では安定的に長期間にわたって継続し、中期を通じて大規模化している。その過程においては、集落形成当時に特定の農耕集団によって営まれた“堀や溝で集落を囲む”という集落景観やアイデンティティを維持し、踏襲した結果、大規模な環濠集落が成立していったと考えられるのである。

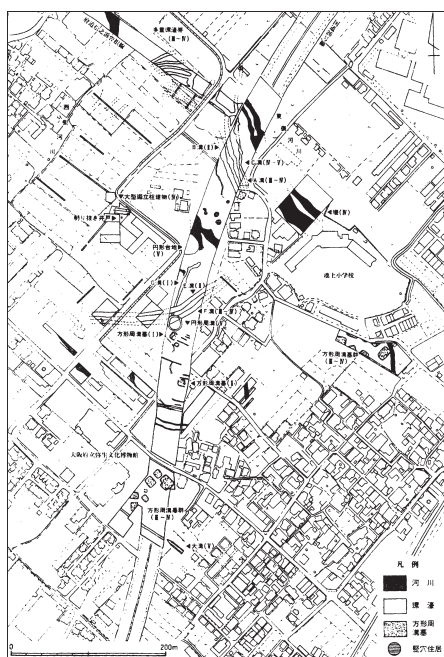


図6 池上曾根遺跡

③高地性の環濠集落は後期を中心として広い範囲で見られるようになる。後期の高地性の環濠集落は福岡県西ノ迫遺跡から山口県石走山遺跡、広島県焼け遺跡、島根県古八幡付近遺跡、鳥取県尾高浅山遺跡、徳島県カネガ谷遺跡、兵庫県大盛山遺跡、大阪府東山遺跡、奈良県東大寺山遺跡、石川県杉谷チャノバタケ遺跡、新潟県裏山遺跡、三重県大城遺跡、愛知県中根山遺跡、静岡県原新田遺跡など、散在的ながらかなり広範囲に分布している。

もっとも、一口に高地性の環濠といっても、内部にほぼ空地の空間を囲む象徴的なもの（大盛山遺跡：Ⅱ-a3型）、極めて小さい見張り台的なもの（石走遺跡：Ⅰ-a3型）、集落そのものを営んでいる大規模なもの（古曾部芝谷遺跡：Ⅰ-c3型）など様々である。長崎県カラカミ遺跡では祭祀関係の高地性の環濠が指摘されている。

環濠集落がそもそも特殊的、希少な集落形態であることはこれまで何度も述べたとおりであり、更に集落立地の面でも水稻農耕の生業では不適な高地に立地する集落であることから、高地性の環濠集落については、これまで研究史で議論されてきたように防御的なもの、見張台的なもの、焼畑村落、象徴的な集落、などなどの個別的・特殊的な事例が想定されるであろう。個々の性格については各地域における環濠集落のあり方の中で検討しなければならないのであって、小論でみてきたような鳥瞰的・一概的な性格を述べることはできないだろう。

ただし、後期の環濠集落については広範囲な地域での高地性環濠集落の成立の他にも、福岡県野方中原遺跡、大分県小迫辻原遺跡など北部九州において方形環濠が出現するといった環濠集落の変遷の上での大きな変化が生じている。

また、これまでの農耕定着期に現れたような環濠集落とは明らかに性格が異なる、大溝（環濠）を伴った径300m規模に達する大規模な集落（群）が各地域で成立している（福岡県今宿五郎江遺跡、大分県二本木遺跡、熊本県方保田東原遺跡、

西弥護免遺跡、兵庫県熊内遺跡、加茂遺跡、大阪府古曾部・芝谷遺跡、滋賀県下鉤遺跡、三重県村竹コノ遺跡、新潟県斐太遺跡群）。これら直接的に前期にまで遡ることのできない、中期末～後期に新たに成立するⅠ-c型の環濠集落には、政治的な変革に伴う戦乱などの社会背景も考慮にいれなければならないであろう。

7. おわりに

筆者は弥生時代～古墳時代に至る戦争の歴史を研究している。その過程において、弥生時代の戦争論について大きな根拠の一つとなってきた環濠集落について興味を抱いた。研究史上では古くより環濠集落は注目を浴び、「標準的な弥生集落＝環濠集落＝防御集落」という図式が一般化していたのは研究史の項目で述べた通りである。

しかし環濠集落の研究が機能論（防御か否か）という点に集中している点や各地域の細かな事例研究が多いこともあって、環濠集落の全体的なイメージは不明瞭だと感じていた。そこで今回のように鳥瞰的に環濠集落の変遷と展開を概観してみたのである。その結果、環濠集落は決して弥生時代の標識的な集落ではなく、非常に希少な集落であったと評価できた。

環濠集落は北部九州に受け入れられたが、貯蔵穴専用環濠を除いて環濠集落の数は少なく、前期後半に岡山県、香川県、兵庫県など瀬戸内東部に濃厚に分布し、そこから大阪府、和歌山県、奈良県、京都府など近畿地方の範囲に広がっている。その後は三重県、愛知県など東海地方を經由して関東南部に広まっているなど、かなり偏った分布を示している。

また、東日本では石川県（西念・南新保遺跡）・新潟県（古津八幡山遺跡）、群馬県（清里・庚申塚遺跡）においては環濠集落を認めることができるものの、福井県、富山県、岐阜県、山梨県では明確な環濠集落がほとんど確認できない。

その分布は利根川以南に限定され、新潟県山

元遺跡が現在のところ最北端である。結局、環濠集落は設楽博己のいう「縄文系弥生文化」〔設楽2000〕には最後まで定着することがなかった集落形態ともいえよう。弥生文化には農耕文化そのものを受け入れない地域、農耕文化と環濠集落の両方を受け入れた地域、農耕文化は受け入れても環濠集落は受け入れない地域など、列島内で様々な地域差を生じせしめているのである。

弥生時代の集団論を考える上では、このような地域差の生じる理由、また環濠集落が希少であるという原因など、派生してくる問題は非常に大きい。環濠集落の希少性の理由の一つとしては「拠点性」や「防御性」も改めて再検討しなければならないと考えている。

今後は初志に戻って、弥生時代の戦争を考える上で環濠集落がどのような位置を占めるのか具体的な検討作業を行っていききたい。

注

- 1) 日本の環濠集落と韓国の環濠集落の実年代の前後関係はどうであろうか。当該期の実年代については学界でいくつかの見解が併存している。その候補の一つであるC¹⁴年代ではこれまでBC300年頃に想定されていた韓国の粘土帶土器（板付Ⅱ式併行）のC¹⁴年代がBC5世紀のある時点、BC6世紀代に遡る可能性が指摘されるなど、弥生時代のC¹⁴年代と齟齬のない年代観が指摘されているので、韓国の無紋土器時代の年代もやや遡って考える必要があるだろう。
- 2) 堅穴住居の存在がない点については削平されたとする見解が根強いが、北部九州の大多数の環濠内に住居跡の形跡が認められず、堅穴住居が認められる削平のない遺跡においては環濠が認められないことから、特殊な住居形態であったか、もしくは当初から住居が存在しなかった可能性が高いであろう。
- 3) 集落概念については、地理学や民俗学では単なる居住域だけを意味せず、ムラ（集落）・ノラ（耕地）・ヤマ（山野）を含む広範囲は社会的統一体と見る見解が強い〔福田1980〕。しかし限られた面積の発掘調査に依拠する考古学においては、そのような景観復元は不可能である。そのため、本論では住居群（堅穴住居・掘立柱建物）など

の遺構が検出された地点を「集落」として捕えることとする。そして溝によって同時代の住居群が囲まれた遺跡を「環濠集落」とし、集住の痕跡がない、非集落的な景観の環濠を「環濠遺跡」とする。

- 4) 小型（a）とは集落の平面規模が概ね150m未満のもの、中型（b）とは150～300m程度のもの、大型（c）とは300m以上のものとし、低地（1）とは沖積平野や扇状地などに立地するもの、台地（2）とは比高差30m未満で台地や河岸段丘などに立地するもの、高地（3）とは比高差30m以上で丘陵や山地に立地しているものである。

参考文献

- 安藤広道
2003 「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』50（1）、pp. 77-97。
- 藤原 哲
2002 「弥生集落の農業経済力」『考古学研究』49（3）、pp. 106-118。
- 藤尾慎一郎
2003 「AMSからみた弥生時代の開始年代」『考古学ジャーナル』510、pp. 8-11。
2009 「弥生時代の実年代」『新弥生時代のはじまり』第4巻、雄山閣、pp. 9-54。
2009 「弥生開始期の集団関係」『日韓先史時代の集落研究』全掲、pp. 48-49。
- 藤尾慎一郎・今村峯雄・西本豊弘
2005 「弥生時代の開始年代－AMS―炭素14年代測定による高精度年代体系の構築」『総研大文化科学研究』1、pp. 73-96。
- 福田アジオ
1980 「村落領域論」『武蔵大学人文学会雑誌』12（2）、pp. 217-247。
- 広瀬和雄
1998 「弥生都市の成立」『考古学研究』45（3）、pp. 34-56。
- 乾 哲也
1996 「弥生中期における池上曾根遺跡の集落構造」『ヒストリア』152、pp. 17-30。
- 石野博信
1973 「3世紀の高城と水城」『古代学研究』68、pp. 1-9。
- 鏡山 猛
1956a 「環溝住居趾小論（一）」『史淵』67、68、pp. 1-26。
1956b 「環溝住居趾小論（二）」『史淵』71、pp.

- 1-23。
- 1958 「環溝住居址小論（三）」『史淵』74、pp. 43-62。
- 1960 「環溝住居址小論（四）」『史淵』81、pp. 29-60。
（以上、鏡山猛1975『九州古文化論攷』pp. 243-343に再録）
- 管榮太郎
1999 「弥生時代環溝集落小論」『同志社大学考古学シリーズⅦ 考古学に学ぶ』pp. 159-170。
- 神奈川考古学会
1997 『かながわの弥生時代社会－後期の環濠集落から考える－』。
- 金関 恕
1986 「総論」『弥生文化の研究』7、p. 3。
- 韓日集落研究会
2009 『日韓集落研究の新たな視点を求めて』。
- 片岡宏二
2003 「環濠の新解釈」『三沢北中尾遺跡』小郡市教育委員会、pp. 171-174。
- 小出輝雄
2006 「環濠は戦争用遺構か」『古代』119、pp. 57-77。
- 2007 「環濠の性格についての再考察」『埼玉の弥生時代』。
- 国立歴史民俗博物館
2009 『日韓先史時代の集落研究』。
- 九州考古学会・嶺南考古学会
1998 『環濠集落と農耕社会の形成』。
- 前田豊邦
1996 「弥生時代の大溝についての覚書」『紀要村川行弘先生古希記念特掲』財団法人のじぎく文化財保護研究財団、pp. 147-150。
- 埋蔵文化財研究会
1995 『ムラと地域社会の変貌』。
- 2006 『弥生集落の成立と展開』。
- 埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会
1988 『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』。
- 豆谷和之
2003 「弥生環濠論」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論集』pp. 73-92。
- 松木武彦
1995 「弥生時代の戦争と日本列島社会の発展過程」『考古学研究』42（3）、pp. 33-47。
- 森岡秀人
1996 「弥生時代抗争の東方波及」『考古学研究』43（3）、pp. 38-61。
- Nikitin.Yほか（徳留大輔訳）
2002 「沿海州地方における古代の城塞と環濠集落」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』九州大学、pp. 167-189。
- 小郡市教育委員会
2003 『三沢北中尾遺跡1地点 環濠編』。
- 岡本孝之
1998 「外土壘環濠集落の性格」『異貌』16。
- 大村 直
2005 「市原市の環濠集落」『市原市文化財センター遺跡発表会要旨』。
- 小野忠熙
1951 『島田川』。
- 1959 「弥生時代の囲郭村落の諸問題」『地理学評論』32（6）（『高地性集落論』1984、pp. 89-108に再録）。
- 大阪府立弥生文化博物館
2001 「環濠集落基礎資料集」『弥生都市は語る 環濠からのメッセージ』pp. 135-181。
- 李 昌熙
2010 「炭素14年代を用いた粘土帯土器の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』158、pp. 79-107。
- 佐原 真
1979 「弥生時代の集落」『考古学研究』25（4）、pp. 11-32。
- 設楽博己
2000 「縄文系弥生文化の構想」『考古学研究』47（1）、pp. 88-100。
- 朱永剛（徳留大輔訳）
2002 「中国東北先史環濠集落の変遷と伝播」『東北アジアにおける先史文化の比較考古学的研究』九州大学、pp. 29-42。
- 武末純一
1990 「北部九州の環溝集落」『乙益重隆先生古希記念 九州上代文化論集』pp. 213-238。
- 寺沢 薫
1999 「環濠集落の系譜」『古代学研究』146、pp. 18。
- 鳥取県教育委員会監修
2005 『日本海をのぞむ弥生の国々－環濠から見える弥生社会とは－』。
- 都出比呂志
1983 「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29（4）、pp. 14-32。
- 1997 「都市の形成と戦争」『考古学研究』44（2）、

pp. 41-57。

若林邦彦

2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』12、pp. 35-54。

山崎純男

1990 「環濠集落の地域性—九州地方」『季刊考古学』31。

山崎頼人

2010 「環濠と集団」『古文化談叢』65 (2)、pp. 1-36。

山崎頼人・杉本岳史・井上愛子

2005 「筑後北部三国丘陵における弥生文化の受容と展開」『古文化談叢』54、pp. 1-33。

吉留秀敏

1994 「環濠集落の成立とその背景」『古文化談叢』33、pp. 1-19。

表3作成に用いた報告書（教育委員会・埋蔵文化財センター等については可能な限り省略し、同一遺跡で複数の報告書が存在する場合は代表的なものを示した）

韓国：国立晋州博物館2001『晋州大坪里玉房1地区遺蹟Ⅰ』、嶺南文化財研究院2002『蔚山川上里聚落遺蹟』、嶺南文化財研究所2002『大邱東川洞聚落遺蹟』、釜慶大学校博物館1998『山清沙月里環濠遺蹟』、釜山大学博物館1995『蔚山檢丹里마을遺蹟』、釜山大学博物館2001『蔚山蓮岩洞遺蹟』、釜山大学博物館2002『蔚山芳基里遺蹟』

福岡県：甘木市2004『平塚川添遺跡Ⅱ』、小郡市1988『横隈北田遺跡』、小郡市1988『三国の鼻遺跡Ⅲ』、小郡市1992『津古内畑遺跡』6、小郡市2000『小郡市史』4、小郡市2002『上岩田周辺遺跡』、小郡市2002『三沢北中尾遺跡1地点』、小郡市2007『三沢南沢遺跡』、小郡市2008『力武内畑遺跡8・9・10』、春日市1976『大南遺跡調査概報』、粕屋市2002『江辻遺跡第5地点』、苅田町1984『葛川遺跡』、下稗田遺跡調査会指導会1985『豊前下稗田遺跡』、福岡県1983『石崎曲り田遺跡Ⅰ』、福岡県1992『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告6』、福岡県1993『九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告書』25、福岡県1994『堺町・大碇遺跡』、福岡県1994『江垣畠田・長通遺跡』、福岡県2005『彼坪遺跡Ⅲ』、福岡県1995『板付遺跡環境整備報告』、福岡市1989『有田・小田部10』、福岡市1992『福岡県西区国史跡野方遺跡環境整備報告書』、福岡市2001『雀居遺跡6』、福岡市2001『那珂27』、福岡市2007『伊都国を支えた大型環濠集落を発見—西区・今宿五郎江遺跡、大塚遺跡第11次調査—（報道発表資料）』、

宗像市1986『宗像埋蔵文化財発掘調査概報』、宗像市2001『東郷登り立』、宗像市2004『光岡長尾Ⅰ』、宗像市1997『宗像市史1』、八女市1986『室岡山ノ上遺跡』、八女市1997『埋蔵文化財概報Ⅳ』佐賀県：基山市1978『千塔山遺跡』、唐津市1982『菜畑遺跡』、佐賀県2003『柚比遺跡群3』、佐賀県2005『吉野ヶ里遺跡』、武雄市1991『小楠遺跡』、中原町1990『原古賀遺跡群Ⅰ』長崎県：九州大学考古学研究室2004『カラカミ遺跡発掘調査現地説明会資料』長崎県2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』大分県：大分県1997『三和教田遺跡C地点』、大分県1997『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書6』、大分県1998『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書9』、大分県2000『中原舟久手遺跡』、大野町1980『大野原の遺跡』宮崎県：宮崎県2005『高田遺跡』、宮崎市1999『下郷遺跡』熊本県：西合志町1993『西合志町埋蔵文化財報告3』、西弥護免遺跡調査団1980『西弥護免遺跡調査概報』鹿児島県：鹿児島県2007『入来遺跡』『先史・古代の鹿児島 資料編』山口県：阿東町1998『宮ヶ久保遺跡』、下関市2000『綾羅木郷遺跡』、山口県1973『宮原遺跡・上広石遺跡』、山口県1983『朝田墳墓群Ⅵ』、山口県1985『よみがえる弥生のムラ・突抜・馬場遺跡-』、山口県1987『岡山遺跡』、山口県1993『石走山遺跡』、山口県埋文センター 2004『吉永遺跡Ⅵ地区』、山口市1990『下東遺跡』広島県：広島県1983『亀山遺跡 第二次発掘調査概報』、広島県埋文センター 1986『大宮遺跡発掘調査報告書』、広島県埋文センター 1990『東郷遺跡・焼け遺跡』、東広島市教育委員会1993『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』岡山県：岡山県2007『百間川兼基遺跡4 百間川沢田遺跡5』、津山市1982『京免・竹ノ下遺跡』、矢掛町2001『清水谷遺跡』鳥根県：鳥根県1980『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、鳥根県1991『要害遺跡』、鳥根県2000『一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』、松江市教育文化振興事業団2005『田和山遺跡』、（財）松江市事業団2010『佐太前遺跡発掘調査報告書』鳥取県：会見町1993『天王原遺跡発掘調査報告書』、西伯町1992『清水谷遺跡』、大山町2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書』、鳥取県教育文化財団2001『大塚岩田遺跡・大塚塚根遺跡』愛媛県：愛媛県1981『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』、愛媛県埋文センター 1998『斎院・古照』、松山市埋文センター 1991『祝谷六丁場遺跡』、松山市埋文センター 1998『岩崎遺跡』、愛媛県埋文センター 2002『土居窪遺跡第2次・祝谷畑中遺跡・祝谷』

木村遺跡第2次』、松山市埋文センター 2003『久米高畑遺跡』香川県：香川県1994『香川県埋蔵文化財発掘調査報告』、香川県埋文センター 1998『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告29』、香川県埋文センター 2002『鴨部・川田遺跡Ⅲ』、高松市2001『鬼無藤井遺跡』、丸亀市2006『中の池遺跡－第12次調査－』高知県：高知県2006『田村遺跡群Ⅱ』徳島県：徳島県2005『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』、徳島大学1998『庄・蔵本遺跡1』兵庫県：神戸市1993『大開遺跡』、神戸市2003『態内遺跡第3次調査発掘調査報告書』、八鹿町1990『小山古墳群・東家の上遺跡』、和田山町1996『和田山町文化財調査報告書7』大阪府：大阪市文化財協会1998『山之内遺跡発掘調査報告』、大阪府1987『陶邑』、大阪府1989『東山遺跡発掘調査概要』、大阪府1999『田井中遺跡発掘調査概報Ⅷ』、大阪府1994『甲田南遺跡発掘調査概報』、大阪府文化財センター 2006『池内遺跡その2 弥生時代調査成果（現地公開資料）』、第二阪和国道内遺跡調査会1969～71『池上・四つ池遺跡1～17』、高槻市1996『古曾部・芝谷遺跡』、高槻市1977『安満遺跡発掘調査報告書—9地区の調査—』、同志社大学1999『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』、東奈良遺跡調査会1981『東奈良発掘調査概報』奈良県：橿原考古学研究所1996『奈良県遺跡調査概報1995年度』、橿原考古学研究所2008『四条シナノ遺跡』、橿原考古学研究所2008『川西根成柿現地説明会資料』、田原本町1985『多遺跡発掘調査報告』、田原本町1995『唐古・鍵遺跡』、天理市1999『平等坊・岩室遺跡』和歌山県：御坊市2002『堅田遺跡』、和歌山県文化財センター 2007『太田・黒田遺跡』京都府：加悦町1992『須代遺跡』、加悦町2005『日吉ヶ丘遺跡』、京都市埋文研究所1996『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』、京都府埋文センター 1986『京都府遺跡調査報告書6』、京都府埋文センター 2004『京都府遺跡調査報告書36』、京都府埋文センター 2009『木津城山遺跡（第6次）木津城跡現地説明会資料』、堀内明博1998『雲宮遺跡（シンボ工業敷地内）』、『第6回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集』、峰山町1977『途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書』、峰山町1975～85『扇谷遺跡発掘調査報告書』滋賀県：滋賀県ほか1986『服部遺跡発掘調査報告書Ⅲ』、滋賀県1992『針江北遺跡・針江川北遺跡（Ⅰ）』、滋賀県2005『下鈎遺跡』、守山市1990『守山市文化財調査報告書38』、守山市2006『下之郷遺跡確認調査報告書Ⅲ』、守山市2007『伊勢遺跡確認調査報告書Ⅴ』三重県：安濃町1998『大城遺跡発掘調査報告書』、三重県埋文センター

1998『一般国道42号松坂・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅷ』、三重県埋文センター 2004『筋違遺跡発掘調査報告』、三重県埋文センター 2009『村竹コノ遺跡』、三重県埋文センター 2010『林垣内遺跡現地説明会資料』、四日市市1966『大谷遺跡発掘調査報告書』、四日市市1973『永井遺跡発掘調査報告書』愛知県：愛知県埋文センター 1990『阿弥陀寺遺跡』、愛知県埋文センター 1991～1994『朝日遺跡』、愛知県埋文センター 1992『山中遺跡』、愛知県埋文センター 2002『平手町遺跡』、愛知県埋文センター 2003『猫島遺跡』、愛知県埋文センター 2007『伝法寺野田遺跡』、春日井市2000『松河戸遺跡』、豊田市1996『梅坪遺跡Ⅲ』、名古屋市1999『埋蔵文化財調査報告書30』静岡県：（財）静岡県埋文研究所2011『西通北遺跡』、浜松市2008『伊場遺跡総括編』、浜松市文化協会1990『松東遺跡発掘調査報告書』、浜松市文化協会2000『山の神遺跡5次』、浜松文化協会2005『梶子北（三永）・中村遺跡』、富士宮市1993『富士宮市の遺跡』石川県：石川県立埋文センター『谷内・杉谷遺跡群』、金沢市1996『西念・南新保遺跡Ⅳ』新潟県：新潟県2000『上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅵ』、新潟県2009『県内遺跡発掘調査報告書Ⅰ山元遺跡』、新津市2004『八幡山遺跡発掘調査報告書』岐阜県：各務原市1994『宮原遺跡A地区発掘調査報告書』長野県：長野県埋文センター 1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』、長野県埋文センター 1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16』、長野県埋文センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12』、長野県埋文センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書5』群馬県：群馬県埋文調査事業団1981『清里・庚申塚遺跡』、渋川市1986『中村遺跡』、高崎市2005『史跡日高遺跡』、沼田市1995『沼田市史』、沼田市2003『日影平遺跡』神奈川県：綾瀬市1996『綾瀬市史9』、折本西原遺跡調査団1988『折本西原遺跡Ⅰ』、横浜市埋文センター 1991『大塚遺跡』、かながわ考古財団2003『下寺尾西方A遺跡』、神奈川県立埋文センター 1991『砂田台遺跡Ⅱ』、神奈川県1988『神奈川県埋蔵文化財調査報告30』、考古資料刊行会1971『そとごう遺跡調査概報』、殿屋敷遺跡群C地区発掘調査団1985『殿屋敷遺跡群C地区発掘調査報告書』、西野吉論2008『弥生時代後期から古墳時代初頭における集落の変遷について』、『研究紀要75』、本郷遺跡調査団1995『海老名本郷Ⅹ』、横浜市域北部埋文調査委員会1968『横浜市域北部埋蔵文化財調査報告書』、横浜市埋文センター 1990『全遺跡調査概報』、小田原市2000『小田原市遺跡』

調査発表会中里遺跡講演会』東京都：北区飛鳥山博物館2001『環濠を持つムラ・飛鳥山遺跡』、熊野神社遺跡調査会1991『山王三丁目遺跡』、世田谷区1982『下山遺跡Ⅰ』、都立赤塚公園遺跡範囲確認調査会1989『都立赤塚公園内にける環濠集落範囲確認調査概要報告Ⅱ』埼玉県：埼玉県1984『池守・池上』、浦和市1986『北宿・馬場北・馬場小室山遺跡発掘調査報告書』、埼玉県埋文調査事業団1999『中里前原北遺跡Ⅱ』、和光市1993『午王山遺跡』千葉

県：市原市文化財センター 1986『潤井戸西山遺跡』、市原市2006『市原市南岩崎遺跡』、大崎台B地区遺跡調査会1997『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅳ』、国府台遺跡第29地点調査会2002『国府台遺跡』、千葉県開発公社1971『市原市大厩遺跡』、千葉県史料研究財団1996『千葉県の歴史 資料編 考古2』、道庭遺跡調査会1983『道庭遺跡』茨城県：茨城県教育財団1988『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書17』

表3 環濠集落・環濠遺跡の一覧

番号	遺跡名	所在地	形態 長×短m	内部構造	立地 (標高m)	時期 (土器型式)	断面	分類
韓国								
1	芳基里	蔚山	円 140m×(90m)	集落	低丘陵 (比高10m)	無紋土器前期	U字～逆台	I-a2
2	検丹里	蔚山	円 118m×70m	集落 (同時期・溝外にも住居あり)	低丘陵 (比高50m)	無紋土器中期	V字	I-a3
3	川上里	蔚山				無紋土器中期		
4	蓮岩洞	蔚山		儀礼場所?		無紋土器中期		
5	明山里	蔚山						
6	新峴洞	蔚山						
7	連岩洞	蔚山				青銅器時代中期		
8	東川洞	大邱			沖積平野 (39m)			
9	八達洞	大邱	円 (140m)×(80m)	集落	丘陵 (40～50m)	無紋土器前期		I-a3
10	南山	昌原	円 (78m)×44m	集落? 空閑地多し	丘陵 (100m、比高90m)	無紋土器中期	V字～U字	I-a3
11	徳川里	昌原			丘陵 (25m)	無紋土器中期		
12	加音丁洞	昌原	(300m)×(200m)	集落	高地 (47～48m)、台地 (40m)	原三国～三国		I-c3
13	上村里	晋州			河岸段丘	新石器時代中期		
14	大坪里玉房	晋州	円・方? (150m～)×	集落 方形溝が貯蔵穴群を囲む	河岸段丘	無紋土器中期		I-b2
15	鳳凰台	金海	円 (140m)×(240m) 二重?		低丘陵 (10～20m)	前1世紀		I-b2
16	大成洞	金海				原三国時代		
17	温泉洞	釜山			二重環濠	三韓時代前期		
18	平山里	梁山			高地性 (145m)	原三国時代		
19	多芳里貝塚	梁山			高地 (120m)	原三国時代		
20	玉山里	慶尚南道			河岸段丘			
21	沙月里	山淸	小規模環濠		独立丘陵 (73m)	無紋土器中期		
22	松菊里	扶余			低丘陵 (20m)	無紋土器中期		
23	大栗里	淸原			丘陵か (60～70m)	青銅器前期		
24	林洞	慶山			丘陵	前1世紀		
25	錫杖洞	慶州			丘陵 (53m)	無紋土器中期		
26	東鶴山	京畿道				青銅器時代		
27	松邑里	慶尚北道			沖積台地 (70～75m)			
福岡県								
28	那珂遺跡群	福岡市	円 内濠(120m)×(120m)、外濠(150m)	?	低丘陵 (5～11m)	早期 (夜臼)	V字(SD1)、逆台(SD2)	a2
29	那珂遺跡群	福岡市	円 (60m)～(80m)×50m	貯蔵穴のみ	低丘陵 (6m)	前期後葉～中期初頭 (板付I～IIb)	V字	II-a2
30	有田遺跡群	福岡市	円 300m×200m	集落	中位段丘 (13m)	早期～前期初頭 (夜臼・板付I)	V字	I?-b2
31	有田遺跡群	福岡市	円 70m×	集落	中位段丘 (13m)	前期前半	V字	I?-a2
32	今宿五郎江	福岡市	円 (270m)×200m	集落	丘陵端部～平野	後期	V字	I-b1
33	野方中原	福岡市	円: A溝(120m)×100m、方: B溝30m×25m	集落	扇状地 (15～26m)	後期	A溝(逆台)、B溝(V字～逆台)	I-a1
34	板付	福岡市	円 内濠110m×80m、外濠(380m)×(190m)	内濠内は貯蔵穴のみ	低台地 (11m)	前期 (夜臼・板付I)	V字	II-a2
35	雀居	福岡市	円 (200m)×(130m)	集落	低地	後期	逆台	I-b1
36	比恵	福岡市	方 30m×33m	住居・井戸等あり	低台地	後期		I-a2
37	大井三倉	宗像市	円? 70m?	何もなし	低丘陵上 (18m)	前期中葉・短期	V字	II-a2
38	田熊石畑	宗像市				前期	V字	
39	東郷登り立	宗像市	円?	遺構なし	平野 (9m)	前期 (板付I?)	V～U字	II?
40	光岡長尾	宗像市	円 46m×42m	貯蔵穴のみ	独立丘陵 (32m)	前期後半(板付II?)～中期初頭	V字	II-a2
41	今川	福津市	円? (80m)×(60m)	なし (検出住居は環濠に切られる)	丘陵 (14m)	前期 (板付I)	V	a2
42	平塚川添	朝倉市	円 (210m)×110m 多重環濠	集落	氾濫原微高地	後期	U字(滞水)	I-b1
43	西ノ迫	朝倉市	円 (35m)×	集落 (高地性、住居あるが生活臭なし)	丘陵 (100～131m)	後期	逆台	I-a3
44	大碓	うきは市	円? 98m×? 各溝の時期不明	貯蔵穴? 住居は溝外、貯蔵穴は溝内外	低地 (25m)	前期後半～中期初頭	V字～U字	II-a1
45	大南	春日市	不定形?	集落	独立丘陵 (50～56m)	中期～後期 長期	V字	
46	江辻	粕屋町	?	集落	平野微高地 (10m)	早期・短期		非環濠集落
47	彼坪	久留米市	円 73m×	溝内土坑のみ	沖積微高地 (7m)	前期後半	V字	I-a1

48	道倉	久留米市	径160m		低沖積台地上 (8m)	後期～末		b1
49	津古内畑	小郡市	円? 60m×	溝内外から主に貯蔵穴	丘陵先端 (52m)	前期後半 (板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
50	三沢南沢	小郡市	不定? (50m)×	溝内から主に貯蔵穴	段丘 (20m)	前期後半 (板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
51	力武内畑	小郡市	不定? (125m)×	貯蔵穴、住居				
52	横隈山	小郡市	円 77m×53m	貯蔵穴	丘陵 (33m)	前期後半	V字	Ⅱ-a2
53	上岩田	小郡市	円 60m?×	溝内は墓のみ、住居は溝外か	低位段丘 (18m)	前期 (板付Ⅰ)	U字	Ⅱ?-a2
54	三沢北中尾	小郡市	円 径80m～90m	溝内から貯蔵穴	丘陵 (32m)	前期中～後半 (板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
55	大保横枕	小郡市	円 (77m)×(76m)	二重環濠内は主に貯蔵穴	段丘上	前期後半 (板付Ⅱ)	V字	Ⅱ-a2
56	横隈北田	小郡市	円 65m×45m	貯蔵穴	丘陵 (33～35m)	前期中～末	V字	Ⅱ-a2
57	三国の鼻	小郡市	円 (初期)75m×、 (拡張)152m×	集落	丘陵 (40～43m)	後期	U字	Ⅰ-a2
58	立野・大坪	八女市	円 50m? (内濠)	溝内に掘柱建物、溝外に貯蔵穴・掘柱建物	沖積地 (23m)	前期後半～末	V字～U字	a1
59	辻垣畠田・長通	行橋市	不定形 180m×35m	貯蔵穴・土坑	自然堤防 (10～13m)	前期前半～末	V字	Ⅱ?-a2
60	矢留堂ノ前	行橋市	円 (100m)×(80m)			前期		
61	葛川	荻田町	円 57m×43m	貯蔵穴のみ	舌状丘陵先端 (20m)	前期中葉 (板付Ⅱa)	V字	Ⅱ-a2
62	神手	みやこ町	円? (40m)×	貯蔵穴のみ	河岸段丘上 (35m)	前期後葉～中期前半	V字	Ⅱ-a2
佐賀県								
63	岡浦	佐賀市	円 (100m)×	集落	扇状地	後期		Ⅰ-a1
64	惣座	佐賀市	方 (180m)×(160m)	集落	扇状地 (17m)	後期	逆台	Ⅰ-b1
65	榎木	佐賀市	円 69m×	集落	扇状地 (11m)	後期 (終末～古墳)	逆台	Ⅰ-a1
66	小楠	武雄市	円 170m×140m	遺構なし	丘陵上 (11～13m)	前期前半	V字	Ⅱ?-b2
67	ハツ並金丸	鳥栖市	円 20m×20m	環濠内堅穴1、貯蔵穴多数あり	丘陵上	前期 (Ⅰ前半～Ⅱ期)	V字	Ⅱ-a2
68	千塔山	基山町	方 95m×75m	集落 (後期は内外住居、終末は倉庫群)	中位段丘 (53m)	中期～後期	V字～U字	Ⅰ-a2
69	町南	みやき町			段丘上	前期末～	逆台	
70	原古賀三本谷	みやき町	円 57m×46m 二重×2		扇状地 (20m)	後期		a1
71	背ノ尾	吉野ヶ里町	径20m		段丘縁辺			
72	松原	吉野ヶ里町			段丘縁辺	後期末		
73	吉野ヶ里	吉野ヶ里町	不定形 1000m×500m	集落	丘陵 (20m)	前期～後期	V字	Ⅰ-c2
長崎県								
74	原の辻	壱岐市	不定形 (750m)×(300m)	集落	低台地 (18m)	前期～古墳	U字	Ⅰ-c2
75	カラカミ	勝本町	(210m)×(70m)	非集落? 祭祀関連?	丘陵 (80m)	中期後半～後期		Ⅱ-b3
大分県								
76	小部	宇佐市	円	集落		後期		
77	下郡	大分市	円? (65m?)×		自然堤防 (5～7m)	後期	V字	a1
78	松木	豊後大野市	方 (70m～)×	集落? 空地、溝塹絶後に住居群	台地 (226m)	後期		Ⅰ?-a3
79	中原船久手	豊後大野市	不定形 (90m)×(30m)	集落	丘陵 (210m)	後期	U字	Ⅰ-a3
80	二本木	豊後大野市	円? (400m)×	集落	台地 (250m)	後期	V字	Ⅰ-c3
81	三輪教田	日田市	円? (150m?)×	集落	低丘陵先端 (140m)	後期		Ⅰt-a2
82	佐寺原	日田市	方 (150m?)×	不明	台地 (160m)	後期～	逆台	a2
83	小迫辻原	日田市	不定形? 150m×100m	方形居館あり	台地 (120m)	後期～	V字～U字	Ⅰ?-a2
84	白岩	玖珠町	不定形 160m×	土坑のみ、非集落?	丘陵 (390m)	後期後半	逆台	Ⅱ?-b3
宮崎県								
85	下郷	宮崎市	円 80m×	集落	洪積台地 (90m)	中期末～後期 (Ⅳ～Ⅴ期)	逆台～V字	Ⅰ-a2
86	高田	都城市	円? 80m?	集落	扇状地 (148m)	中期前葉～中葉	V字	Ⅰ-a1
熊本県								
87	蒲生上原	山鹿市	円 190m×	集落	台地 (115m)	後期	V字～台地	Ⅰ-b2
88	方保田東原	山鹿市	(330m)×(300m)	集落	台地 (35m)	後期		Ⅰ-c3
89	八反畑	合志市	円 (200m)×		台地 (65m)	後期		b2
90	西弥護免	大津町	円 210m×140m	集落	丘陵	後期	V字	Ⅰ-b3
91	二子塚	嘉島町	円 (300m?)×	集落	台地 (45m)	後期	V字	Ⅰ-c3
92	南鶴	白水町	不定? (500m～)	集落		後期		
93	小野崎	七城町		墓域?		後期～古墳		
94	台	七城町		集落	台地 (73m)	後期		
鹿児島県								
95	入来	日置市			舌状台地 (20m)		V字～U字	
96	松木薗	南さつま市						
97	西ノ丸	串良町		集落	沖積地 (5m)	中期	V字	

山口県								
98	綾羅木郷	下関市	円？ (320m?) ×	貯蔵穴のみ 非集落？	洪積台地 (10～15m)	前期～中期	V字	II-c2
99	吉永	下関市	円？ (100m) × 2？	住居検出なし (古墳時代の住あり)	洪積台地 (4～15m)	前期後半	V字	II?-a2
100	突抜	山口市	円？ (100m) ×	集落	河岸段丘縁辺部 (260m)	中期	U字	I-a2
101	宮ヶ久保	山口市	円 130m ×	集落	盆地内微高地 (300m)	中期 (Ⅲ期)	U字	I-a2
102	朝田墳墓群	山口市	円 45m ×	貯蔵穴20、土坑1、 竪穴住居2	丘陵上 (23～45m)	中期前半 (Ⅳ期)	U字	II?-a3
103	下東	山口市	円 60m ×	溝内は土坑群のみ	扇状地 (17m)	前期末～中期中	V字～逆台	II-a1
104	宮原	下松市	円 80m ×	第Ⅰ環濠内は土坑群、 第Ⅱ環濠内は住居1	扇状地 (46m)	前期後半	V字～U字	II?-a1
105	岡山	周南市	円？ 100m × 60m	集落？ 番小屋程度か	低丘陵 (45～64m)	中期後半 (Ⅳ期)	V字～U字	I-a3
106	石走山	熊毛田布施町	円 25m × 25m	集落	丘陵 (39m)	後期	V字	I-a3
広島県								
107	大宮	福山市	円 80m ×	環濠内は住居なし	自然堤防 (13m)	前期 (後半) ～Ⅱ古	U字	II-a1
108	亀山	福山市	円 150m × 60m	非集落か 同時期の住居等なし	独立丘陵 (37m)	前期 (後半) ～Ⅱ古	V字～U字	II?-a2
109	助平2号	東広島市	円 36m × 26m	非集落 環濠内は何もなし	丘陵尾根 (233m)	中期 (Ⅲ期)	V字	II-a3
110	溝口4号	東広島市		集落？		中期		
111	焼け	北広島町		集落	低丘陵 (320m)	後期	逆台	I-a3
岡山県								
112	百間川沢田	岡山市	円 90m × 85m	集落	自然堤防 (2m)	前期 (後半)	V字～U字	I-a1
113	京免	津山市	円 240m ×	集落	平地 (110m)	後期	逆台	I-b1
114	清水谷	矢掛町	円 60m × 50m	集落	舌状台地	前期 (中) ～中期 (初頭)	U字	I-a2
島根県								
115	田和山	松江市	円 92m × 78m	なし？	独立丘陵 (47m)		V字	II-a2
116	佐太前	松江市	不定？	溝と同時期の遺構、ほぼなし	沖積低地 (5m)	前期末	U字	II-a1
117	経塚鼻	安来市	円 (50m) ×	非集落	丘陵上 (45m)	前期末～中期	V字	II-a3
118	要害	雲南市	円 (50m) ×	なし？	丘陵上 (95～100m)	前期・中期	V字	II-a3
119	古八幡付近	江津市	円 (80m) ×	集落	丘陵	中期～後期	U字	I-a3
120	前立山	吉賀町	円 40m ×	非住居 (土坑)	丘陵 (310m)	中期		II-a3
鳥取県								
121	天王原	米子市	円？	非住居	丘陵 (30m)	前期後葉	V字	
122	今津岸の上	米子市	円 130m × 80m		丘陵 (34m)	前期後葉	V字	a3
123	妻木晩田	米子市	円 65m × 65m	何もなし	丘陵 (90m)	後期前葉	V字	II-a3
124	日下寺山	米子市	円？	何もなし？	丘陵 (108m)	後期前葉	V字	
125	尾高浅山	米子市	円 130m × 60m	集落	丘陵 (72m)	後期		I-a3
126	大塚岩田	大山町	不定形??	住居あり、集落と溝の 関係は不透明	台地 (27m)	前期後葉	V字	
127	宮尾	南部町	円 44m × 39m		微高地 (24m)	中期前葉	V字	a2
128	清水谷	南部町	円 46m × 31m	貯蔵穴のみ	丘陵 (50m)	前期後葉	V字	II-a3
129	後中尾	倉吉市	円 100m ×	集落	台地 (60m)	中期	V字	I-a3
愛媛県								
130	岩崎	松山市	円？ 100m ×	貯蔵穴のみ	扇状地 (37m)	前期後半～Ⅱ期	逆台	II-a1
131	久米高畑	松山市	円？	非集落か 土坑はあり	台地上 (37m)	前期末～中期	逆台	II-a2
132	来住V	松山市	円？	非集落か	台地 (40m)	前期～中期中	U字	II?-a2
133	祝谷畑中	松山市	円？ (150m?)	集落	丘陵 (40m)	前期末～中期中頭	V字	I-b2
134	斎院烏山	松山市				前期末～中期中頭	逆台	
香川県								
135	鬼無藤井	高松市	円 80m × 60m	集落	沖積低地 (4m)	前期後半	逆台～U字	I-a1
136	龍川五条	善通寺市	円	集落	沖積低地 (23m)	前期 (突帯文共伴)～ 中期中頭	U字	I-a1
137	五条	善通寺市	円	集落	沖積低地 (20m)	前期後半～Ⅱ期	逆台	I-a1
138	中の池	丸亀市	円	集落 松菊里形住居	沖積低地 (10m)	前期前半 (Ⅰ期中段階)～ Ⅱ期中初	V字	I-a1
139	鴨部・川田	さぬき市	円	集落	谷底低地 (7m)	前期前半 (中段階)～ 中期	逆台	I-a1
高知県								
140	田村	南国市	円	集落	扇状地 (6～10m)	前期 (中頃)～中期	V字	I-a1
徳島県								
141	庄・蔵元	徳島市	円	集落？ 土坑群多し	扇状地 (3m)	前期中頃～中期	V字	I?-a1
142	カネガ谷	鳴門市	不定形 200m? ×	集落	丘陵 (85～100m)	後期	段状遺構と報告	I-b3

兵庫県								
143	大開	神戸市	円 65m×45m	集落	臨海平野 (4m)	前期前半	V字	I-a1
144	表山	神戸市	円		丘陵	後期		
145	熊内	神戸市	円 (300m?)×	集落	扇状地 (34m)	後期	U字	I-c1
146	加茂	川西市	円 (300m?)×	集落	台地 (40m)	中期中葉～後期		I-c2
147	寄居	龍野市	不定形	集落	丘陵谷間 (40m)	後期	V字	
148	東家の上	養父市	(60m)×(30m)	非集落? 住居と環濠が重複	丘陵上 (90～100m)	前期 (後半)～中期 (Ⅲ期)	V字	Ⅱ?-a3
149	大盛山	朝来市	円 60m×50m	非集落? 環濠内に住居1、外に4	丘陵	後期	V期	Ⅱ?-a3
大阪府								
150	安満	高槻市	円 (160m)×	集落?	扇状地 (9m)	前期 (後半)	U字	I-b1
151	古曾部・芝谷	高槻市	不定形 (400m×200m)	集落	丘陵 (70m)	後期	U字～V字	I-c3
152	東奈良	茨木市	円? (120m)×	集落	沖積平野 (10m)	前期 (後半)	U字	I-a1
153	田井中	八尾市	円 110m×	集落	自然堤防 (9m)	前期 (前半～後半)		I-a1
154	池内	松原市	円? (75m)×	集落	沖積低地 (8m)	前期 (中頃)		I-a1
155	東山	河南町	円 60m?×	集落	丘陵 (100m)	後期	V字	I-a?1
156	野々井	堺市	円 90m×50m	集落	段丘 (44m)	後期末	U字	I-a2
157	観音寺山	和泉市	不定形 450m×250m	集落	丘陵 (60～65m)	後期	V字	I-c3
158	池上・曾根	和泉市ほか	円 400m×	集落	扇状地 (9m)	前期 (後半)～後期	U字	I-c1
奈良県								
159	平等坊・岩室	天理市	円? (250m)×?	集落	沖積平野 (52m)	前期～後期	U字	I-b1
160	東大寺山	天理市	不定形? (200m)×	集落	丘陵 (120m)	後期	V字	I-b3
161	唐古・鍵	田原本町	円? (500m)×?	集落	沖積地 (47m)	前期 (新)～後期	U字	I-c1
162	多	田原本町	円? (350m)×?	集落	氾濫源 (51～53m)	前期～中期 (Ⅲ期)	U字	I-c1
163	坪井・大福	橿原市	円? (300m)×?	集落	自然堤防 (61～62m)	前期～後期	U字	I-c1
164	四条シナノ	橿原市	円 150m×100m	住居なし、貯蔵穴、土坑あり	扇状地 (62m)	前期前半～Ⅱ期	逆台	Ⅱ?-a1
165	川西根成柿	橿原市ほか			沖積地	前期		
166	桜井公園	桜井市	三重		丘陵 (127m)	後期	V字	
167	鴨都波	御所市	円 (350m)×(250m)?		扇状地 (90m)	前期 (後半)～後期		I-c1
和歌山県								
168	太田・黒田	和歌山市	円? (200m)×	集落	自然堤防 (4～5m)	前期後半～中期 (Ⅱ期)	V字	I-b1
169	堅田	御坊市	円 120m×100m	集落	自然堤防 (2m)	前期 (前半～後半)	U字～V字	I-a1
京都府								
170	雲宮	長岡京市	円 120m×100m	集落	扇状地 (10～14m)	前期前半～後半	逆台	I-a1
171	上久世	京都市	円? (100m?)×	集落	自然堤防 (18m)	後期	V字	I-a1
172	木津城山	木津川市		集落	丘陵 (90m)	後期	V字	
173	太田	亀岡市	円 (160m?)×	集落? 土坑墓とピット群	扇状地 (100m)	前期 (後半)～中期 (Ⅱ期)	U字	I-a1
174	日吉ヶ丘	与謝野町	円? 100m×?	非集落 工房?あり 住居は溝外	低丘陵上	中期 (Ⅲ期～Ⅳ期)		Ⅱ-a2
175	須代	与謝野町	円? (150m?)×	集落? 工房か	河岸段丘 (20m)	中期 (Ⅳ期)～後期	U字	I?-a2
176	扇谷	京丹後市	不定形 (250m)×(50m)	不明 住居なし	小丘陵上 (55m)	前期 (後半)～中期 (Ⅱ期)	V字	Ⅱ?-b3
177	途中ヶ丘	京丹後市	(100m?)×	不明	台地上	前期～後期	U字	I?-a3
178	浦明	京丹後市		集落	河岸段丘 (12m)	中期 (Ⅱ期)	V字	
滋賀県								
179	下之郷	守山市	円 300m×220m?	集落	氾濫原 (94m)	中期 (Ⅲ期～Ⅳ期)	U字～逆台	I-c1
180	二ノ畔・横枕	守山市	円 400m×	集落	氾濫原 (94m)	中期 (Ⅳ期)～後期	U字	I-c1
181	服部	守山市	円 400m×?	集落	扇状地 (88m)	中期 (Ⅲ期)～後期	U字	I-c1
182	伊勢	守山市	円 250m×	集落	扇状地 (98m)	後期	逆台(皿状)	I-b1
183	針江北・川北	高島市	円 143m×	集落	氾濫原 (87m)	後期	逆台(皿状)	I-a1
184	下鉤	栗東市	円 400m×?	集落	氾濫原 (95m)	中期 (Ⅳ期)～後期	逆台(皿状)	I-c1
三重県								
185	大谷	四日市市	円 130m×	集落	台地上 (20～30m)	前期(中段階～後半)		I-a2
186	永井	四日市市	円 (150m)×	集落?	台地上 (20～30m)	前期 (後半)	U字	I?-a2
187	大城	津市	不定形? 90m×	集落	丘陵 (30～40m)	後期～古墳	U字	I-a3
188	納所	津市			沖積平野 (5m)	前期		
189	林垣内	津市	円?		丘陵端部	後期～古墳		
190	堀町	松坂市	円 130m×50m	集落	自然堤防 (2m)	後期	U字	I-a1
191	筋違	松坂市		集落 畑	沖積平野 (5m)	前期前半	V字	I?-a1
192	村竹コノ	松坂市	円 (300m?)×	集落	沖積地	後期	U字	
193	天王	鈴鹿市	円			後期～	V字	
194	天花寺丘陵	嬉野町			丘陵 (37m)	後期	V字	

愛知県								
195	見晴台	名古屋市	円 230m×	集落	台地縁辺 (15m)	後期	V字	I-b2
196	三王山	名古屋市	円 100m×	集落	丘陵縁辺 (30m)	後期～古墳	U字	I-a2
197	平手町	名古屋市	円 ?	集落? 西志賀貝塚北限か	沖積平野 (5m)	中期 (Ⅱ期～Ⅳ期)	U字	
198	松河戸	春日井市	円 120m×80m	住居未検出・土坑・墓検出	沖積平野 (12～14m)	前期(中段階～後半)	逆台	Ⅱ?-a1
199	朝日	清須市	円 (350m)×(300m)	集落	後背湿地 (2m)	中期 (Ⅱ期)～古墳	逆台～V字	I-c1
200	阿弥陀寺	あま市	円 (450m)×(330m)	集落	沖積平野 (0m)	中期 (Ⅲ期)～後期	U字～逆台	I-c1
201	梅坪	豊田市	円 150m×	集落	低位段丘 (38m)	後期～	V字～U字	I-a2
202	猫島	一宮市	円 200m×	集落	沖積平野 (8m)	中期 (Ⅱ期～Ⅲ期)	逆台	I-b1
203	山中	一宮市		住居と方形周溝墓を区画する条溝	氾濫原 (5m)	前期 (後半?)	U字	
204	伝法寺野田	一宮市	円 35m×	集落	自然堤防 (5m)	中期 (Ⅳ期)	U字	I-a1
205	赤日子	蒲郡市				後期		
206	若宮	豊橋市				後期		
207	中根山	吉良町						
静岡県								
208	伊場	浜松市	円 150m×120m	集落	海岸平野 (1m)	後期	V字～U字	I-a1
209	伊場遺跡群(梶子・梶子北・中村)	浜松市	円 ? (400m)×	集落	海岸平野 (0m)	中期 (Ⅲ期)・後期	逆台	I-c1
210	松東	浜松市	円 (80m)×	集落? (住居未検出・土坑・ピット)	沖積平野 (5m)	後期	U字	I?-a1
211	山の神	浜松市	円 (200m)×(170m)	集落	沖積平野 (5m)	後期	U字・逆台	I-b1
212	西通北	静岡市		内部未調査	砂礫洲 (6m)	中期中葉	U字・逆台	
石川県								
213	西念・南新保	金沢市	円 90m×70m	集落	低地 (3m)	中期 (Ⅳ期)～後期	V字	I-a1
214	河田山	小松市	円 (50×30m)		丘陵	後期	V字	
215	東の場タケノハナ	羽咋市				中期～後期		
216	鉢伏茶臼山	かほく市	不定形	集落	丘陵	後期		
217	杉谷チャノバタケ	中能登町	円:1号(85m)×(47m)、 不定形:2号(70m)×	集落	丘陵 (60～110m)	中期 (Ⅳ期)(2号)、 後期 (1号)	V字	I-a3
218	北吉田フルワ	志賀町	不定形		丘陵	後期		
富山県								
219	新堀西	富山市	円 ?	集落?		後期		
新潟県								
220	古津八幡山	新潟市	不定形 (130m)×(100m)、 (100m)×	集落	丘陵 (53m)	後期	V字	I-a3
221	裏山	上越市	不定形 120m×60m	集落	丘陵 (90m)	後期	U字	I-a3
222	斐太	妙高市	不定形 50m×		丘陵	後期～古墳		I?-a3
223	山元	村上市	不定形 100m×25m		丘陵 (40m)	中期末～後期		I?-a3
224	釜蓋	村上市	円 (170m)×(100m)	集落?	低地	後期～古墳		I?-a1
岐阜県								
225	宮塚	各務原市	円 60m×	非集落?	沖積地 (27m)	中期	逆台	Ⅱ?-a1
長野県								
226	篠ノ井	長野市	円 150m	集落 (溝外にも住居あり)	氾濫原 (350m)	後期		I-a1
227	餅田・西一里塚	佐久市			台地 (685m)	後期		
228	戸坂	佐久市			台地 (710m)	後期		
229	城の前	東御市				後期		
230	大門田	東御市			河岸段丘 (550m)	後期		
231	八名の土	東御市				後期		
232	上木戸	塩尻市	円	集落 (溝外にも住居あり)	台地 (700m)	後期	V字	
233	中村B	伊那市	円 (100m)×		河岸段丘 (648m)	後期		I-a2
234	座光寺原	飯田市			扇状地 (540～550m)			
235	恒川遺跡群	飯田市			扇状地 (430m)			
群馬県								
236	清里・庚申塚	前橋市	円 140m×112	集落	台地 (165m)	中期後半 (竜見町)	V字	I-a2
237	西原	前橋市	円 (145m)×	集落	台地	終末～古墳	逆台	I-a2
238	中村	渋川市	円 (60m?)×	集落 住居・周溝墓	河岸段丘 (162m)	中期		I-a2
239	日影平	沼田市	円 110m×85m	集落 溝外にも住居あり	段丘 (384m)	後期後半 (樽)	V字	I-a2
240	町田小沢Ⅱ	沼田市	(96m～)	集落	段丘 (比高13m)	後期終末	V字～逆台	I-a2
241	高崎城三ノ丸	高崎市	(120m)	集落	台地	後期	逆台	I-a2
242	日高	高崎市	円 130m×110m	集落	扇状地	後期		I-a1

神奈川県								
243	そとごう	横浜市	方 95m×65m	住居・周溝墓	台地 (50m)	後期	V字	I-a2
244	殿屋敷C区	横浜市	円 82m×73m	集落	丘陵先端 (60m)	後期	V字～逆台	I-a2
245	朝光寺原	横浜市	円 180×165m	集落	台地 (28～45m)	中期末 (宮の台)	V字	I-b2
246	大塚	横浜市	円 200m×130m	集落	台地 (50m)	中期末 (宮の台)～ 後期初頭 (朝光寺)	V字	I-b2
247	折本西原	横浜市	円 (300m)×	集落	台地 (25m)	中期 (宮の台)	V字～逆台 逆	I-b2
248	四枚畑	横浜市	方 (90m)×	集落	台地 (50m)	後期前半 (朝光寺原)	逆台	I-a2
249	網崎山	横浜市	円 150m×150m	集落	台地 (30m)	中～後期	V字～逆台	I-b2
250	大原	横浜市	円 130m×100m	集落 (溝内外に周溝墓あり)	台地 (44m)	後期 (久ヶ原・弥生町)	逆台	I-a2
251	権田原	横浜市	方 240m×150m	集落	台地 (25m)	中期 (宮の台)	V字～逆台	I-b2
252	中里	小田原市		集落	沖積低地	中期中頃		自然流露?
253	神埼	綾瀬市	円 103m×65m	集落	台地 (24m)	後期	V字	I-a2
254	原口	平塚市	円 (72m)	集落	台地 (72m)	後期		I-a2
255	海老名本郷	海老名市	円 (240m)×(80m)	集落	台地 (20～22m)	後期	V字	I-b2
256	西方A	茅ヶ崎市	不定形? 400m×260m	集落	台地 (13m)	中期末	V字	I-c2
257	白久保A	茅ヶ崎市	方形? 150m～	集落		後期		
258	砂田台	秦野市	円 (120m)×(160m)	集落	台地 (55m)	中期	V字～逆台	I-a2
259	千年伊勢山台	川崎市	円? (100m)×	集落	台地 (40～42m)	後期後半	V字	I-a2
東京都								
260	山王	大田区	円 (130m)×(90m)	集落	台地 (24m)	後期	V字	I-a2
261	四葉地区	板橋区	円 (100m)×(90m)	集落?	台地 (15m)	後期	V字	I?-a2
262	赤羽台	北区	円 175m×132m	集落	台地 (20m)	後期	V字	I-b2
263	飛鳥山	北区	円 260m×150m	集落	台地 (20～25m)	中期末	V期	I-b2
264	方南峰	杉並区		集落	台地	後期		
265	下山	世田谷区	円 (90m)×(70m)	集落	台地 (35～38m)	後期	逆台	I-a2
埼玉県								
266	中里前原	さいたま市	円 100m?	集落	台地 (14m)	後期	V字	I-a2
267	中里前原北	さいたま市	円 80m×60m	集落	台地 (14m)	後期	V字	I-b2
268	北袋新掘	さいたま市	? (300m)×		台地	後期		I-b2
269	深作東部遺跡群	大宮市	円 50m?×	集落	台地 (10～12m)	後期末 (前野町)	V字	I-a2
270	池上	熊谷市				中期中頃	V字	非環濠集落
271	北宿	浦和市	円 (60m～)×	集落	台地 (15m)	後期	V字	I-a2
272	馬場北	浦和市	円 70m×90m	集落	台地 (16m)	後期	V字	I-a2
273	木曾良	羽生市	円 70m×50m	集落	台地 (14m)	後期 (弥生町)	V字	I-a2
274	午王山	和光市	円 (220m)×(110m)	集落	台地 (20～24m)	中期後半～後期	V字	I-b2
275	吹上	和光市	円 200m×200m	集落	台地	後期 (前野町)		I-b2
276	花ノ木	和光市	円? (200m)×	集落	台地	中期後半～後期		I-b2
277	北通	富士見市	円 (300m)×(200m)?	集落	台地	後期		I-b2
278	南通	富士見市	円?	集落	台地	後期		
279	伊佐島	ふじみ野市	円? (80m)×	集落	台地	後期		I-a2
280	稲荷山東	朝霞市	?		台地	後期		
千葉県								
281	国府台	市川市	円? (220m)×(100m)	集落	台地 (20～25m)	中期 (宮の台)	V字	I-b2
282	草刈	市原市	円 径100m(古)、 径150m(新)	集落?	台地 (40m)	中期		I-a2
283	大厩	市原市	円 (100m)×	集落	台地 (30m)	中期	V字	I-a2
284	台	市原市	円 (185m)×(125m)	集落	台地 (19m)	中期 (宮の台)	V字	I-b2
285	根田代	市原市	円 205m×135m	集落	台地 (20m)	中期 (宮の台)	V字	I-b2
286	南総中	市原市	円 210m×95m	集落	台地 (48～50m)	中期末～後期初頭	V字	I-b2
287	潤井戸西山	市原市	円? (170m)×(130m)			中期		91
288	南岩崎	市原市				中期		センタ1
289	戸張作	千葉市	不定?			中期		
290	高岡大山	佐倉市	円 50m×50m			終末～古墳		
291	石川阿ら地	佐倉市	円? 50m×			終末～古墳		
292	大崎台	佐倉市	円 150m×140m	集落	台地 (30m)	中期	V字	I-b2
293	田原窪	八千代市	円 130m×120m			中期		
294	道庭	東金市	円 (230m)×(160m)	集落	台地 (50m)	中期～後期		I-b2
295	根形台遺跡群	袖ヶ浦市		集落	台地 (30～60m)	中期	V字	
296	鹿島台	君津市		集落	台地	中期～後期		
297	萱野	館山市				後期		
茨城県								
298	屋代B	龍ヶ崎市	?	集落?	台地 (23～24m)	中期 (Ⅳ期)	V字	

The Establishment and Expansion of Moat Encircling Settlements in the Yayoi Period

FUJIWARA, Satoshi

The Graduate University for Advanced Studies, School of Cultural and Social Studies,
Department of Japanese History

This paper presents research on moat encircling settlements of the Yayoi period in Japan.

Until the 1980s, many archaeologists thought the moat encircling settlements of the Yayoi period were standard Defense settlements for warfare. Recently, however, many researchers have not adopted the defense theory.

In this paper I review and consider Yayoi moat encircling settlements based on the research results so far. I have studied the research on over 250 moat encircling settlements in Japan and Korea. It is thought that, moat encircling settlements were not standard large settlements of the Yayoi period, rather, they were very rare settlements and only particular farming groups lived at such moat encircling settlements.

With the establishment of agricultural culture, encircled settlements declined and eventually disappeared in Yayoi Culture. Most moat encircling sites were not settlements; however, some moat encircling settlements in the middle stage of the Yayoi period were large settlements.

The examination and understanding of the moat encircling settlements of the Japanese islands can illuminate various regional differences.

Key words: moat encircling settlements, moat encircling sites, agricultural culture, cultural customs, rare